

10.1.6 植物

～重要な種及び重要な群落（海域に生育するものを除く）～

(1) 調査の結果の概要

1) 種子植物・シダ植物に関する植物相の状況

(a) 文献その他の資料調査

a) 調査の基本的な手法

植物相に係る文献及びその他の資料を表 10.1.6-1 に示す。

文献及びその他の資料から、調査地域に生育記録のある種を抽出した。

表 10.1.6-1 植物相に係る文献及びその他の資料

番号	収集文献
1	愛知県の植物相（1995 年、愛知県）
2	豊川の自然（2007 年、豊橋市自然史博物館）
3	STOP！移入種 守ろう！あいちの生態系～愛知県移入種対策ハンドブック～（2012 年、愛知県環境部自然環境課）
4	「平成 25 年度 「いきものみつけ」事務局運営業務報告書」（2014 年、環境省自然環境局）
5	「愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック 2020」（2020 年 3 月、愛知県環境局環境政策部自然環境課）
6	愛知県の生物多様性 グリーンデータブックあいち 2017-維管束植物編-（2017 年、愛知県）

b) 調査地域

調査地域は、対象事業実施区域及びその周囲とした。

c) 調査の結果

「第 3 章 3.1.5 動植物の生息又は生育、植生及び生態系の状況」に示したとおり、文献及びその他の資料により対象事業実施区域及びその周囲では 200 科 2,388 種の植物を確認した。

(b) 現地調査

a) 調査の基本的な手法

植物相の調査手法を表 10.1.6-2 に示す。

調査は、任意踏査による目視確認により実施した。

表 10.1.6-2 植物相の調査手法

手法	具体的内容
任意踏査	調査地域の範囲を対象に、樹林、草地等の主要な群落を網羅するように設定した調査経路を 4 季とも踏査したほか、他の箇所については、随時補足的に踏査した。踏査により確認された植物種（シダ植物及び種子植物）の種名と生育状況等を調査票に記録した。なお、「2) 植生の状況」によって確認した植物についても、植物相を把握するための情報として活用した。

b) 調査地域

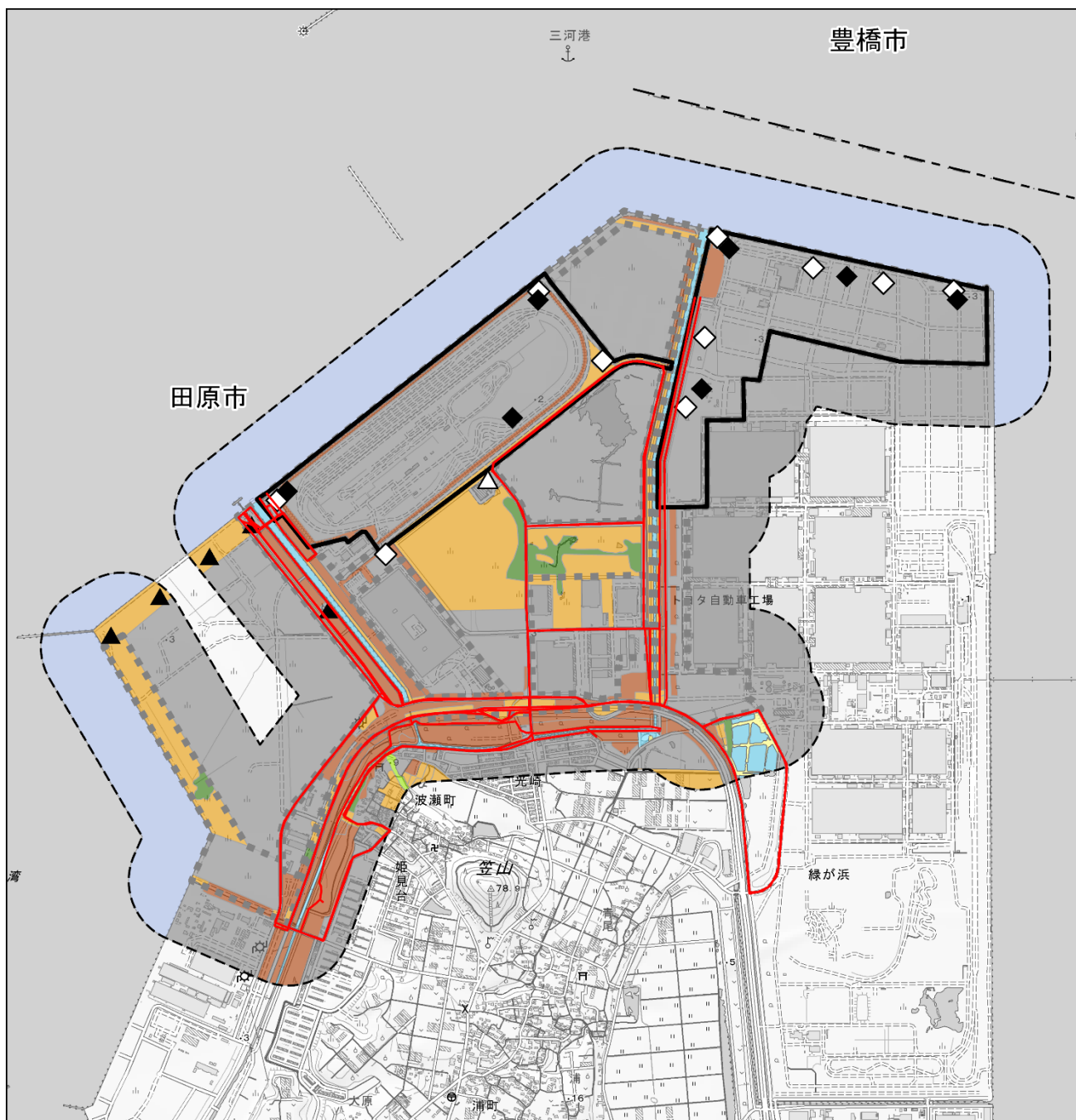
調査地域を図 10.1.6-1 に示す。

調査地域は、方法書段階における対象事業実施区域及びその周囲 100m までの区域とした。

c) 調査地点

調査経路を図 10.1.6-1 に示す。

調査経路は、調査地域内に生育していると考えられる各植物種の生育環境を網羅的に確認するように設定した。



凡例

--- 行政界

■ 対象事業実施区域(準備書段階)

□ 対象事業実施区域(方法書段階)

◆ 風力発電機設置予定位置(本事業)

◇ 既設風力発電機設置位置(更新対象)

▲ 既設風力発電機設置位置(他事業:稼働中)

△ 既設風力発電機設置位置(他事業:撤去済み)

□ 調査地域

— 任意踏査経路

環境類型区分

■ 広葉樹林

■ 植林

■ 竹林等

■ ヨシ草地等

■ その他草地等

■ 開放水域(内水面)

■ 開放水域(海面)

■ 市街地等

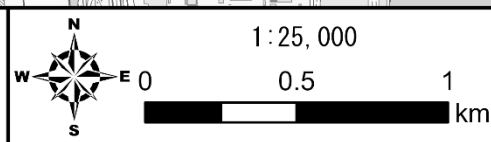


図 10.1.6-1 植物相の調査地域及び経路

d) 調査期間等

植物相の調査時期、実施日及び時間帯を表 10.1.6-3 に示す。

調査は秋季、早春季、春季、夏季の 4 季実施した。

また、植生調査時に確認した植物種も併せて整理した。

表 10.1.6-3 植物相の調査時期、実施日及び時間帯

調査時期	調査手法	調査日	調査時間帯
秋季	任意踏査	2021 年 10 月 21 日～22 日	昼間
早春季		2022 年 4 月 15 日	昼間
春季		2022 年 5 月 20 日	昼間
夏季		2022 年 8 月 1 日～2 日	昼間

注) 植生調査（実施時期：表 10.1.6-7）時に確認した植物種も併せて整理した。

e) 調査の結果

植物相の調査結果の概要を表 10.1.6-4 に示す。

植物の確認種一覧は、資料編に示す。

現地調査の結果、秋季に 217 種、早春季に 211 種、春季に 283 種、夏季に 248 種の計 443 種の植物を確認した。

表 10.1.6-4 植物相の調査結果の概要

分類群			科数	秋季	早春季	春季	夏季	群落組成調査	合計
シダ植物			8	6	5	6	9	7	12
種子植物	裸子植物		4	7	5	4	6	4	8
	被子植物	単子葉類	16	55	36	65	64	31	122
		真正双子葉類	69	142	160	201	162	78	292
		その他	6	8	5	7	8	7	9
計			103 科	217 種	211 種	283 種	248 種	126 種	443 種

2) 植生の状況

(a) 文献その他の資料調査

a) 調査の基本的な手法

既存文献等による情報の収集並びに当該情報の整理及び解析を行い、重要な種及び重要な植物群落の分布・生育の状況及び生育環境の状況を把握した。

b) 調査地域

調査地域は、対象事業実施区域及びその周囲とした。

c) 調査の結果

文献及びその他の資料による現存植生図を図 10.1.6-2 に示す。

出典)「自然環境調査 Web-GIS shape データダウンロード 植生調査(1/25,000 縮尺)」(環境省ホームページ
<http://gis.biodic.go.jp/webgis/sc-023.html> 2026 年 5 月閲覧)
 ※植生図の作成時期は、第 6 回…1999 年度～2004 年度、第 7 回…2005 年度～



凡例

--- 行政界

■ 対象事業実施区域(準備書段階)

□ 対象事業実施区域(方法書段階)

◆ 風力発電機設置予定位置(本事業)

◇ 既設風力発電機設置位置(更新対象)

▲ 既設風力発電機設置位置(他事業:稼働中)

△ 既設風力発電機設置位置(他事業:撤去済み)

□ 調査地域

1.マサキートベラ群集

2.シイ・カシ二次林

3.タブノキ・ヤブニッケイ二次林

4.コナラ群落(VII)

5.アカメガシワ・カラスザンショウ群落

6.メダケ群落

7.ネザサ群落

8.伐採跡地群落(VII)

9.ヨシクラス

10.ヒルムシロクラス

11.スギ・ヒノキ・サワラ植林

12.クロマツ植林

13.その他植林(常緑広葉樹)

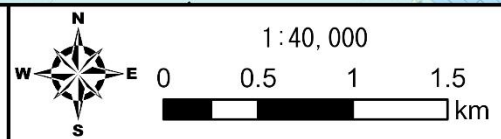
14.竹林

15.ゴルフ場・芝地

16.路傍・空地雑草群落

17.放棄畑雑草群落

18.果樹園



19.畑雑草群落

20.水田雑草群落

21.放棄水田雑草群落

22.市街地

23.緑の多い住宅地

24.残存・植栽樹群をもった公園、墓地等

25.工場地帯

26.造成地

27.開放水域

28.自然裸地

図 10.1.6-2 文献及びその他の資料による現存植生図

(b) 現地調査

a) 調査の基本的な手法

植生の調査手法を表 10.1.6-5 に示す。

調査は航空写真判読及び現地踏査による植生区分、植物社会学的手法に準拠したブラウーンブランケの植物社会学植生調査法より実施した。

表 10.1.6-5 植生の調査手法

手法	具体的内容
航空写真判読及び現地踏査による植生区分	植生図の作成は、文献その他の資料、空中写真等を用いて予め作成した植生判読素図をもとに、現地調査により補完し作成した。
ブラウーンブランケの植物社会学植生調査法	現地調査は、植生判読素図をもとに設定した各植物群落を代表する地点において、ブラウーンブランケの植物社会学植生調査法により、コドラート内に生育する植物の被度・群度を記録することにより行った。コドラートの大きさは、対象とする群落により、樹林地で10m×10mから20m×20m、草地で1m×1mから3m×3m程度をおおよその目安とした。各コドラートについて生育種を確認し、階層の区分、各植物の被度・群度を記録し、群落組成表を作成した。

b) 調査地域

調査地域を図 10.1.6-3 に示す。

調査地域は、方法書段階における対象事業実施区域及びその周囲 250m までの区域を基本とし、植生判読素図を基に設定した地点において実施した。

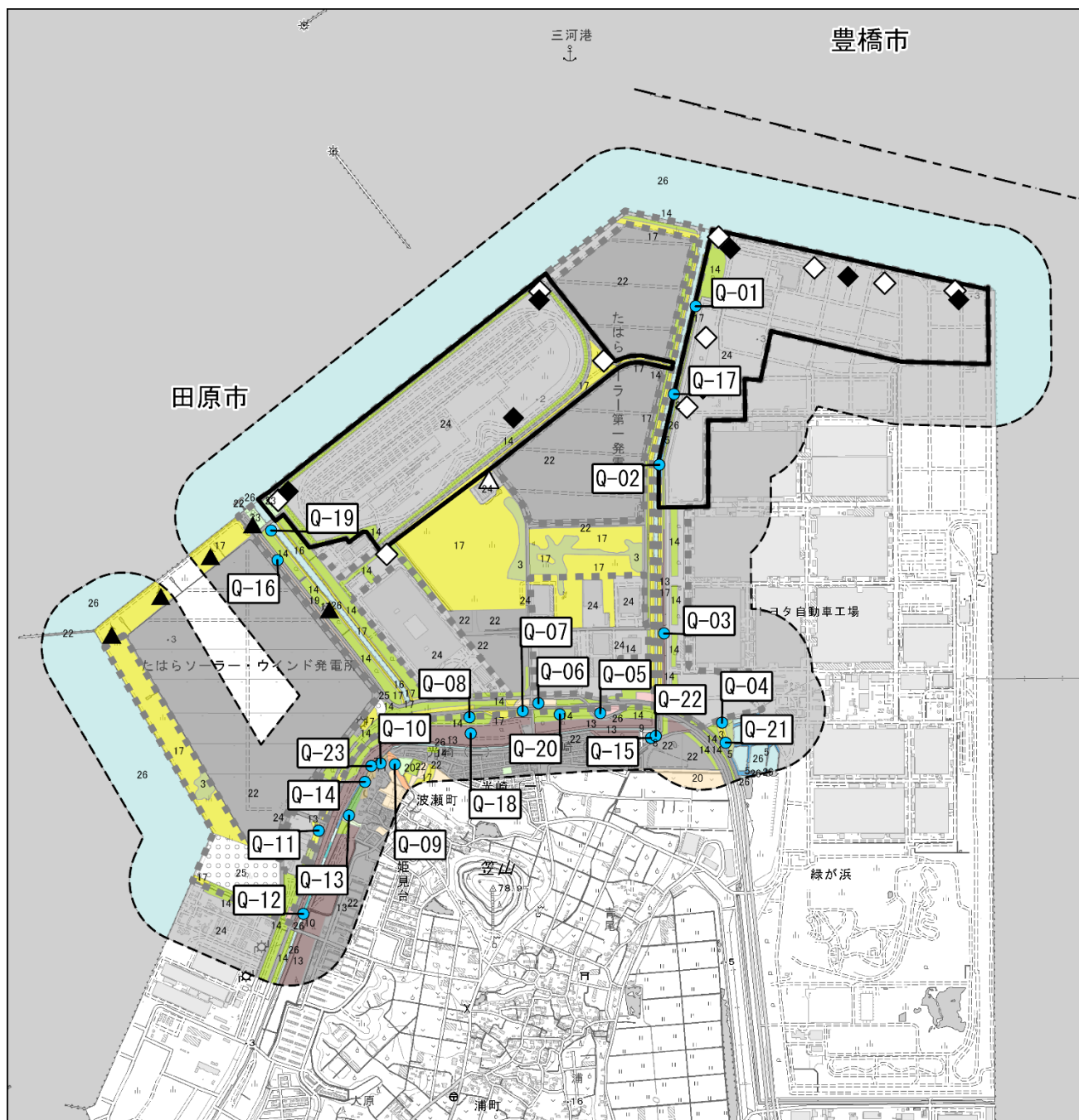
c) 調査地点

調査地点毎の植物群落を表 10.1.6-6 に、調査地点を図 10.1.6-3 に示す。

ブラウーン・ブランケの植物社会学的植生調査法の調査地点は、写真判読及び現地踏査による植生区分により区分した植物群落毎の代表地点に設定した。その結果、調査地点は 23 地点となった。

表 10.1.6-6 調査地点毎の植物群落

番号	植物群落	調査地点
1	タブノキ・エノキ群落	Q-14
2	ヤナギ低木林	Q-17
3	アカメガシワ群落	Q-04
4	ダンチク群落	Q-13
5	ヨシ群落	Q-02
6	ヒトモトスキ群落	Q-21
7	サンカクイ群落	Q-23
8	ヒメガマ群落	Q-15
9	ヒルムシロ属優占群落	Q-22
10	コアマモ群落	Q-12
11	クズ群落	Q-05
12	スギ・ヒノキ植林	Q-10
13	クロマツ植林	Q-03、Q-18
14	植栽樹林群	Q-08、Q-20
15	竹林	Q-09
16	チガヤ群落	Q-11
17	セイタカアワダチソウ群落	Q-01、Q-19
18	ヨモギ・メドハギ群落	Q-07
19	メヒシバ群落	Q-16
20	アキノエノコログサ群落	Q-06



凡例

--- 行政界

■ 対象事業実施区域(準備書段階)

□ 対象事業実施区域(方法書段階)

◆ 風力発電機設置予定位置(本事業)

◇ 既設風力発電機設置位置(更新対象)

▲ 既設風力発電機設置位置(他事業:稼働中)

△ 既設風力発電機設置位置(他事業:撤去済み)

□ 調査地域

● ブラウン・プランクの植物社会学的植生調査法地点

- 1 タブノキ・エノキ群落
- 2 ヤナギ低木林
- 3 アカメガシワ群落
- 4 ダンチク群落
- 5 ヨシ群落
- 6 ヒトモツスキ群落
- 7 サンカウイ群落
- 8 ヒメガマ群落
- 9 ヒルムシロ属優占群落
- 10 コアマモ群落
- 11 クズ群落
- 12 スギ・ヒノキ植林
- 13 クロマツ植林



1:25,000

0.5

1

km

14 植栽樹林群

15 竹林

16 チガヤ群落

17 セイタカアワダチソウ群落

18 ヨモギ・メドハギ群落

19 メシバ群落

20 アキノエノコログサ群落

21 人工草地

22 市街地・道路

23 公園

24 工場地帯

25 造成地

26 開放水域

図 10.1.6-3 植生の調査地域及び地点

d) 調査期間等

植生の調査時期、実施日及び時間帯を表 10.1.6-7 に示す。

調査は、秋季に 1 回、夏季に 1 回実施した。

表 10.1.6-7 植生の調査時期、実施日及び時間帯

調査時期	調査手法	調査日	調査時間帯
秋季	ブラウンーブランケの植物社会学的植生調査法	2021 年 10 月 21 日～22 日	昼間
夏季		2022 年 8 月 1 日～2 日	昼間

e) 調査の結果

(i) 航空写真判読結果

植生図の作成は、文献その他の資料をもとに、現地調査により補完し作成した。

分類した植物群落を表 10.1.6-8 に示す。

表 10.1.6-8 植物群落一覧

番号	植物群落名（凡例名）
1	タブノキエノキ群落
2	ヤナギ低木林
3	アカメガシワ群落
4	ダンチク群落
5	ヨシ群落
6	ヒトモトススキ群落
7	サンカクイ群落
8	ヒメガマ群落
9	ヒルムシロ属優占群落
10	コアマモ群落
11	クズ群落
12	スギ・ヒノキ植林
13	クロマツ植林
14	植栽樹林群
15	竹林
16	チガヤ群落
17	セイタカアワダチソウ群落
18	ヨモギ・メドハギ群落
19	メヒシバ群落
20	アキノエノコログサ群落
21	人工草地
22	市街地・道路
23	公園
24	工場地帯
25	造成地
26	開放水域

(ii) 現地踏査

植物群落等の概要を表 10.1.6-9 に、現地調査による現存植生図を図 10.1.6-4 に、現地調査による植生自然度を図 10.1.6-5 に示す。また、ブラウンーブランケの植物社会学的植生調査法の結果は、資料編に示す。

航空写真判読及び現地調査の結果、調査範囲内で最も広い面積を占めていたのは工場地帯で、その割合は 35.4% であった。次いで開放水域が 23.0%、市街地・道路が 22.1% の順であった。これらの土地利用を合計すると調査範囲の 80.4% を占める。植物が被覆している部分はセイタカアワダチソウ群落、チガヤ群落、植栽樹林群等であった。埋立地の緑化帯の一部にはクロマツ植林がみられた。水辺には、ヤナギ低木林、ヨシ群落、コアマモ群落等がわずかにみられた。

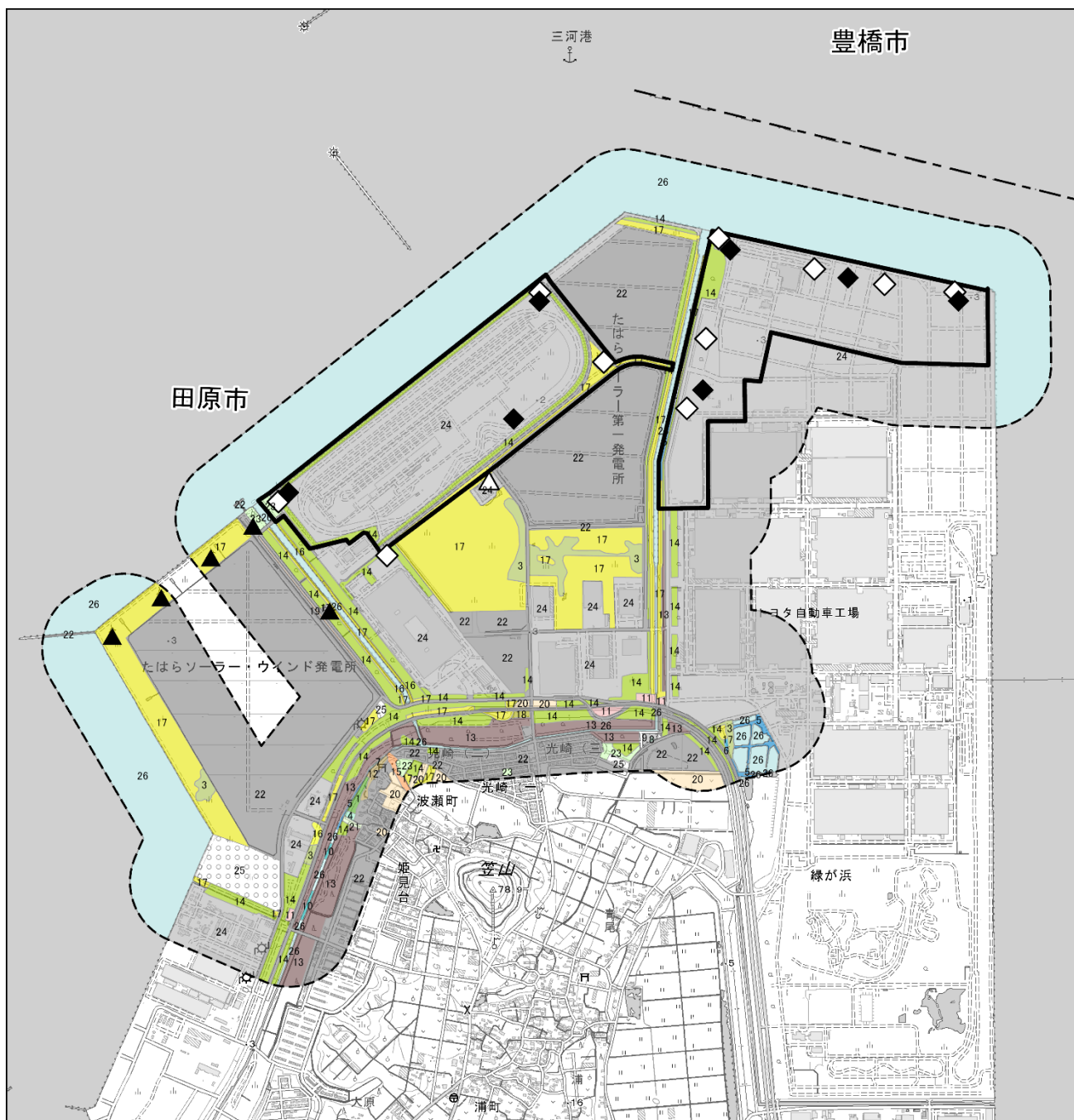
なお、調査地域内の植生自然度は植生自然度 1（市街地等）が広くみられた。植物が被覆している部分は植生自然度 6（植林地）、植生自然度 4（二次草原（背の低い草原））、植生自然度 7（二次林）が多かった。また、面積的にはごくわずかであるが、植生自然度 10（自然草原）、植生自然度 9（自然林）もみられた。

表 10.1.6-9 植物群落等の概要 (1/2)

番号	群落名等	植生 自然度	概要及び分布状況
1	タブノキーエノキ 群落	9	標高 7m 付近の斜面で確認した。群落高は 10.0m～12.0m 程度で、エノキが優占する常緑広葉樹林。高木層には、エノキ、タブノキ、ニワウルシが混交する。このほか、亜高木層には、ヤブニッケイ、タブノキ、ヤブツバキが、低木層には、ヤブツバキ、タブノキ、トベラ、メダケ、ヤブニッケイ等が、草本層には、フウトウカズラ、エノキ、ネズミモチ、メダケ等が、それぞれ生育する。
2	ヤナギ低木林	9	標高 3m 付近の水路沿いで確認した。群落高は 3.0m～4.0m で、カワヤナギが優占する河辺林。低木層には、カワヤナギが生育する。このほか、草本層には、ヨシ、ススキ、セイタカアワダチソウ、ヨモギ等が生育する。
3	アカメガシワ群落	7	標高 3m 付近の埋立地等で確認した。群落高は 3.0m～4.0m で、先駆性木本類のアカメガシワが優占する落葉広葉樹林。低木層には、アカメガシワが生育する。このほか、草本層には、アカメガシワ、クズ、セイタカアワダチソウ、ヨモギ等が生育する。
4	ダンチク群落	5	標高 4m 付近の平地の道路沿いで確認した。群落高は 4.0m～5.0m で、ダンチクが優占する高茎草本群落。草本層には、ダンチク、マルバツユクサ等が生育する。
5	ヨシ群落	5	標高 2m～3m 付近の水路沿いや養鰻池跡周辺で確認した。群落高は 1.0m～3.0m 程度で、ヨシが優占する高茎草本群落。草本層には、ヨシ、セイタカアワダチソウ、カワヤナギ等が生育する。
6	ヒトモトススキ群落	5	標高 1m 付近の養鰻池跡付近で確認した。群落高は 2.0m～3.0m 程度で、ヒトモトススキが優占する高茎草本群落。草本層には、ヒトモトススキ、クズ等が生育する。
7	サンカクイ群落	5	水路内で確認した。群落高は 1.0m～1.5m 程度で、サンカクイが優占し、他の種の生育はみられなかった。
8	ヒメガマ群落	5	青尾新田排水機場の吐出水槽内で確認した。群落高は 2.0m～3.0m 程度で、ヒメガマが優占し、他の種の生育はみられなかった。
9	ヒルムシロ属優占 群落	10	青尾新田排水機場の吐出水槽内で確認した。ヒルムシロ属の一種が浮葉状態で優占する。このほか、沈水植物のエビモ、オオカナダモ、浮遊植物のアオウキクサが生育する。
10	コアマモ群落	10	水路内で確認した。海生沈水草本植物のコアマモが優占し、他の種の生育はみられなかった。
11	クズ群落	5	標高 3m～4m 付近の道路沿いや埋立地で確認した。群落高は 0.2m～0.4m 程度で、クズが優占し、階層構造は認められない。クズのほか、セイタカアワダチソウ、ススキ、ヨモギ等が生育する。
12	スギ・ヒノキ植林	6	標高 7m 付近の斜面で確認した。群落高は 10.0m～12.0m 程度で、スギ、ヒノキが植栽された植林地。高木層には、スギ、ヒノキが混交する。このほか、低木層には、イヌビワ、ヤブツバキ、ヤブニッケイ等が、草本層には、フウトウカズラ、ホシダ、クサギ等が、それぞれ生育する。
13	クロマツ植林	6	標高 3m～4m 付近の埋立地の緑化帯で確認した。群落高は 10.0m～15.0m 程度で、クロマツが植栽された植林地。高木層と亜高木層には、クロマツが生育する。このほか、低木層には、ヒサカキ、フウトウカズラ、ハマヒサカキ等が、草本層には、ヤブカラシ、ヘクソカズラ、ツユクサ、コチヂミザサ、フウトウカズラ等が、それぞれ生育する。

表 10.1.6-9 植物群落等の概要 (2/2)

番号	群落名等	植生 自然度	概要及び分布状況
14	植栽樹林群	6	標高 3m~4m 付近の埋立地の緑化帯で確認した。群落高は 11.0m~14.0m 程度で、タブノキ、ケヤキ等が植栽された植林地。高木層にはタブノキ、ケヤキ、アラカシ、ムクノキ等が生育する。このほか、亜高木層には、サンゴジュ、イヌマキ、カクレミノ、ウバメガシ、マテバシイ等が生育する。低木層には、カクレミノ、トベラ、サンゴジュ、ネズミモチ、タブノキ、ヤツデ、ヤマモモ、イヌビワ等が、草本層には、フウトウカズラ、コチヂミザサ、キヅタ、ハスノハカズラ、ヘクソカズラ、サネカズラ、サルトリイバラ等がそれぞれ生育する。
15	竹林	3	標高 3m~11m 付近の斜面で確認した。群落高は 10.0m~12.0m 程度で、マダケが生育する竹林。高木層には、マダケが生育する。このほか、亜高木層には、マダケ、タブノキ、ヤブツバキが、低木層には、ヤブツバキ、アオキ、トベラ等が、草本層には、フウトウカズラ、テイカカズラ、アオキ等がそれぞれ生育する。
16	チガヤ群落	4	標高 3m~4m 付近の埋立地の道路沿いで確認した。路傍・空地雑草群落である。群落高は 0.2m~0.4m 程度で、チガヤが優占し、定期的に除草されている。このほか、草本層には、チガヤ、タチスズメノヒエ、オウタチカタバミ等が生育する。
17	セイタカアワダチソウ群落	4	標高 3m~4m 付近の埋立地の空地や道路沿いで確認した。路傍・空地雑草群落である。群落高は 0.8m~2.0m 程度で、セイタカアワダチソウが優占する。このほか、草本層には、チガヤ、ヨモギ、ヘクソカズラ等が生育する。
18	ヨモギ・メドハギ群落	4	標高 3m~4m 付近の埋立地の道路沿いで確認した。路傍・空地雑草群落である。群落高は 1.0m~1.5m 程度で、ヨモギ、メドハギが優占し、定期的に除草されている。このほか、草本層には、セイタカアワダチソウ、ススキ、アレチヌスビトハギ等が生育する。
19	メヒシバ群落	4	標高 3m~4m 付近の埋立地の道路沿いで確認した。路傍・空地雑草群落である。群落高は 0.2m~0.4m 程度で、メヒシバが優占し、定期的に除草されている。このほか、草本層には、イヌビエ、シロツメクサ等が生育する。
20	アキノエノコログサ群落	4	標高 1m~15m 付近の休耕中の畑地で確認された。畑雑草群落である。群落高は 0.4m~0.6m 程度で、アキノエノコログサが優占する。このほか、草本層には、ガガイモ、ツユクサ等が生育する。
21	人工草地	4	水路沿いで確認した。植生はほとんど存在しない。
22	市街地・道路	1	調査地域の全域で確認した。植生はほとんど存在しない。
23	公園	3	調査地域の南部で確認した。植生はほとんど存在しない。
24	工場地帯	1	調査地域の全域で確認した。植生はほとんど存在しない。
25	造成地	1	調査地域では水路沿いで確認した。植生はほとんど存在しない。
26	開放水域	1	調査地域の全域で確認した。植生はほとんど存在しない。



凡例

--- 行政界

■ 対象事業実施区域

◆ 風力発電機設置予定位置(本事業)

◇ 既設風力発電機設置位置(更新対象)

▲ 既設風力発電機設置位置(他事業:稼働中)

△ 既設風力発電機設置位置(他事業:撤去済み)

□ 調査地域

1 タブノキ・エノキ群落

2 ヤナギ低木林

3 アカメガシワ群落

4 ダンチク群落

5 ヨシ群落

6 ヒトモトスギ群落

7 サンカクイ群落

8 ヒメガマ群落

9 ヒルムシロ属優占群落

10 コアマモ群落

11 クズ群落

12 スギ・ヒノキ植林

13 クロマツ植林

14 植栽樹林群

15 竹林

16 チガヤ群落

17 セイタカアワダチソウ群落

18 ヨモギ・メドハギ群落

19 メヒシバ群落

20 アキノエノコログサ群落

21 人工草地

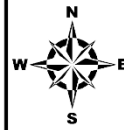
22 市街地・道路

23 公園

24 工場地帯

25 造成地

26 開放水域



1:25,000

0.5

1

km

図 10.1.6-4 現地調査による現存植生図

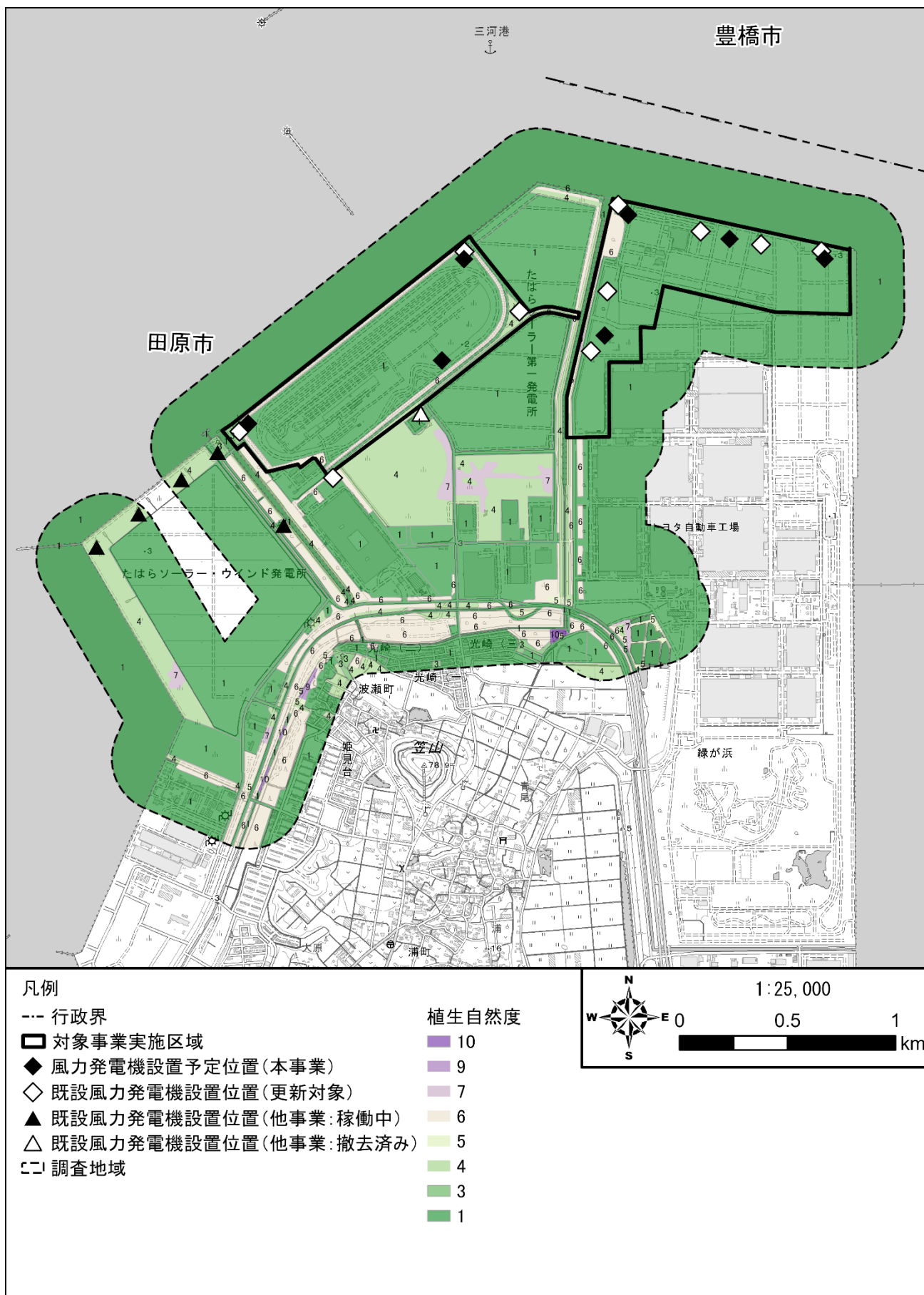


図 10. 1. 6-5 現地調査による植生自然度

(c) 過去の調査結果との比較

対象事業実施区域及びその周囲では、「トヨタ自動車田原工場風力発電設置事業」(以下、「第 1 風力発電所」という)に係る植物の生育状況を把握するための調査が行われた。

植生の分布状況を比較するため、第 1 風力発電所の調査結果(2016 年 7 月～2017 年 4 月実施)を図 10.1.6-6 に、本事業の調査結果(2021 年 10 月～2022 年 8 月)を図 10.1.6-7 に示す。

対象事業実施区域及びその周囲の変遷をみると、2016 年時点では外来低木群落、塩沼地植生及び路傍・空地雑草群落が存在したが、本事業における調査結果ではアカメガシワ群落(2016 年時点の外来低木群落に相当)の面積が増加し、塩沼地植生は消失している。また、セイタカアワダチソウ群落(2016 年時点の路傍・空地雑草群落に相当)の面積に大きな変化はなく、同程度であった。

以上のことから、対象事業実施区域及びその周囲では、乾燥化が進行することにより植生の変化が起きていると考えられる。

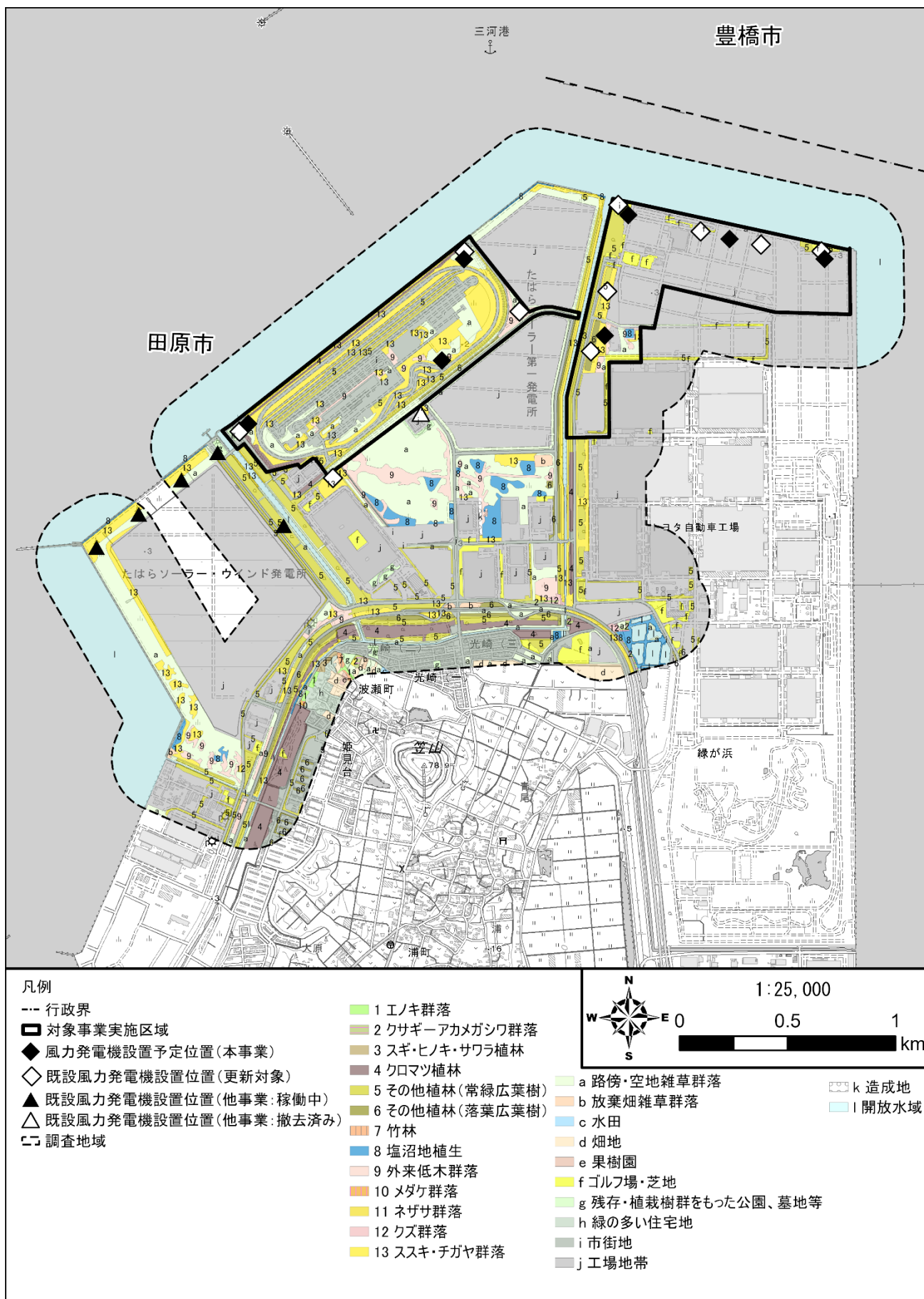
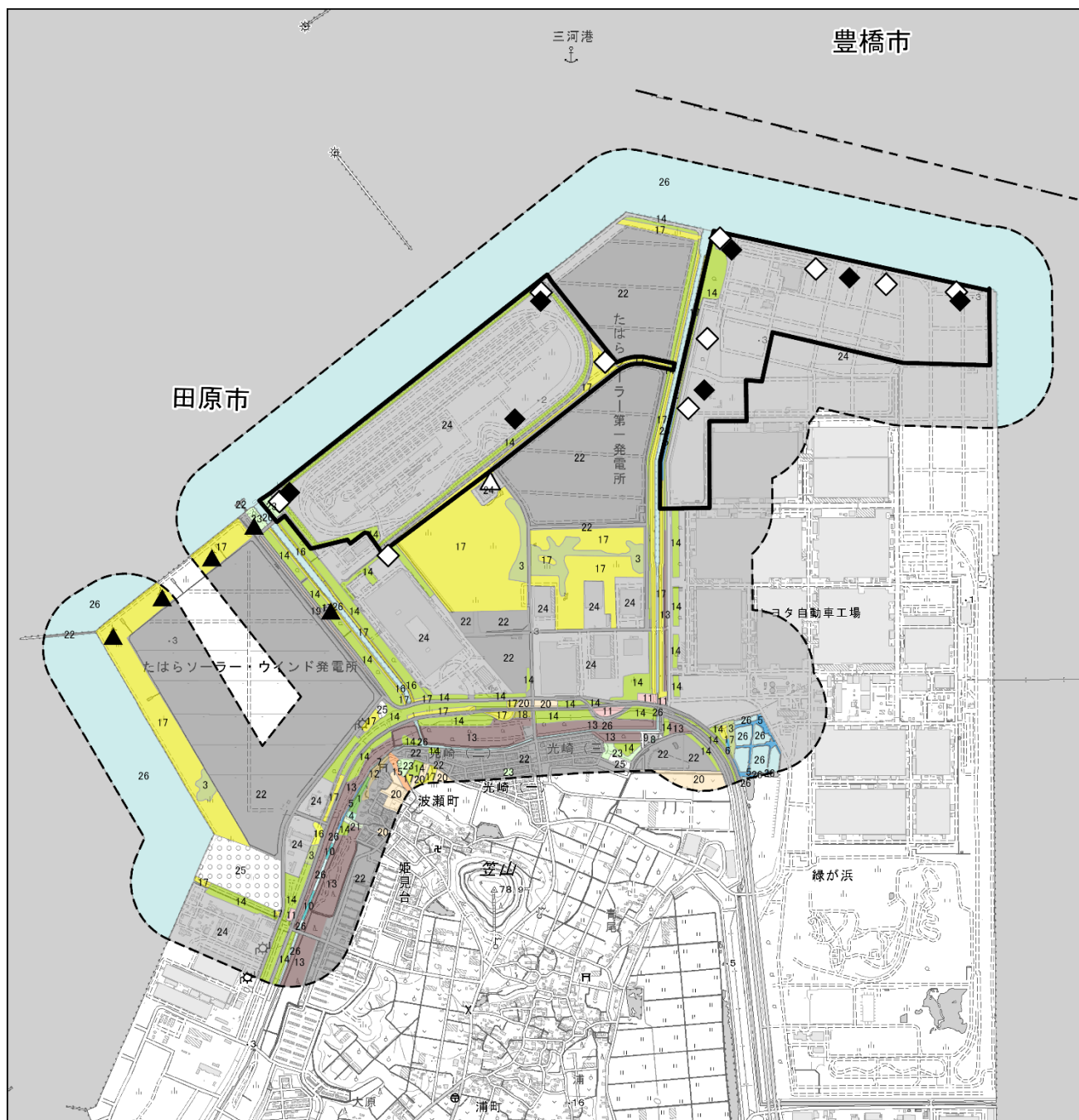


図 10.1.6-6 第1風力発電所の調査結果（2016年7月～2017年4月）



凡例

--- 行政界

■ 対象事業実施区域

◆ 風力発電機設置予定位置(本事業)

◇ 既設風力発電機設置位置(更新対象)

▲ 既設風力発電機設置位置(他事業:稼働中)

△ 既設風力発電機設置位置(他事業:撤去済み)

□ 調査地域

1 タブノキ・エノキ群落

2 ヤナギ低木林

3 アカメガシワ群落

4 ダンク群落

5 ヨシ群落

6 ヒトモトスキ群落

7 サンカウ群落

8 ヒメガマ群落

9 ヒルムシロ属優占群落

10 コアマモ群落

11 クズ群落

12 スギ・ヒノキ植林

13 クロマツ植林

14 植栽樹林群

15 竹林

16 チガヤ群落

17 セイタカアワダチソウ群落

18 ヨモギ・メドハギ群落

19 メヒシバ群落

20 アキノエノコログサ群落

21 人工草地

22 市街地・道路

23 公園

24 工場地帯

25 造成地

26 開放水域



1:25,000

0.5

1

km

図 10.1.6-7 本事業の調査結果 (2021 年 10 月~2022 年 8 月)

b) 現地調査

(i) 調査の基本的な手法

調査地域で確認した植物について表 10. 1. 6-10 の選定基準に基づき、学術上又は希少性の観点から重要な種を抽出した。

(ii) 調査地域

調査地域は、「1) 種子植物・シダ植物に関する植物相の状況」の現地調査の調査地域と同じ区域とした。

(iii) 調査の結果

現地調査で確認した植物の重要な種を表 10. 1. 6-11 に、確認状況を表 10. 1. 6-12 に、確認位置を図 10. 1. 6-8 に示す。現地調査の結果、2 科 2 種の重要な種を確認した。

表 10. 1. 6-11 現地調査で確認した植物の重要な種

番号	科名	種名	改変区域		重要な種の選定基準				
			内	外	I	II	III	IV	V
1	イソマツ科	ハマサジ	—	●				NT	NT
2	オオバコ科	カワヂシャ	—	●				NT	
計	2 科	2 種	0 種	2 種	0 種	0 種	0 種	2 種	1 種

- 注 1) 種名、並び順及び上位分類群は、「河川水辺の国勢調査のための生物リスト [令和 7 年度生物リスト]」に準拠し、各文献で補足した。
- 2) 重要な種の選定基準は、表 10. 1. 6-10 の番号に対応する。
- 3) ホルトノキは植栽・逸出由来であるため、重要な種からは除外した。自生種の場合、「レッドリストあいち 2025」（2025 年、愛知県）の VU に該当する。
- 4) 「●」は改変区域の内若しくは外で確認したことを、「—」は確認しなかったことを示す。

表 10. 1. 6-12 植物の重要な種の確認状況

番号	種名	確認状況
1	ハマサジ	●分布状況 ・改変区域外で 580 株（3 地点）を確認した。 ○調査時期 ・秋季に 580 株（3 地点）をセイタカアワダチソウ群落、市街地・道路及び開放水域（内水面）で確認した。
2	カワヂシャ	●分布状況 ・改変区域外で 150 株（2 地点）を確認した。 ○調査時期 ・春季に 150 株（2 地点）をクロマツ植林で確認した。

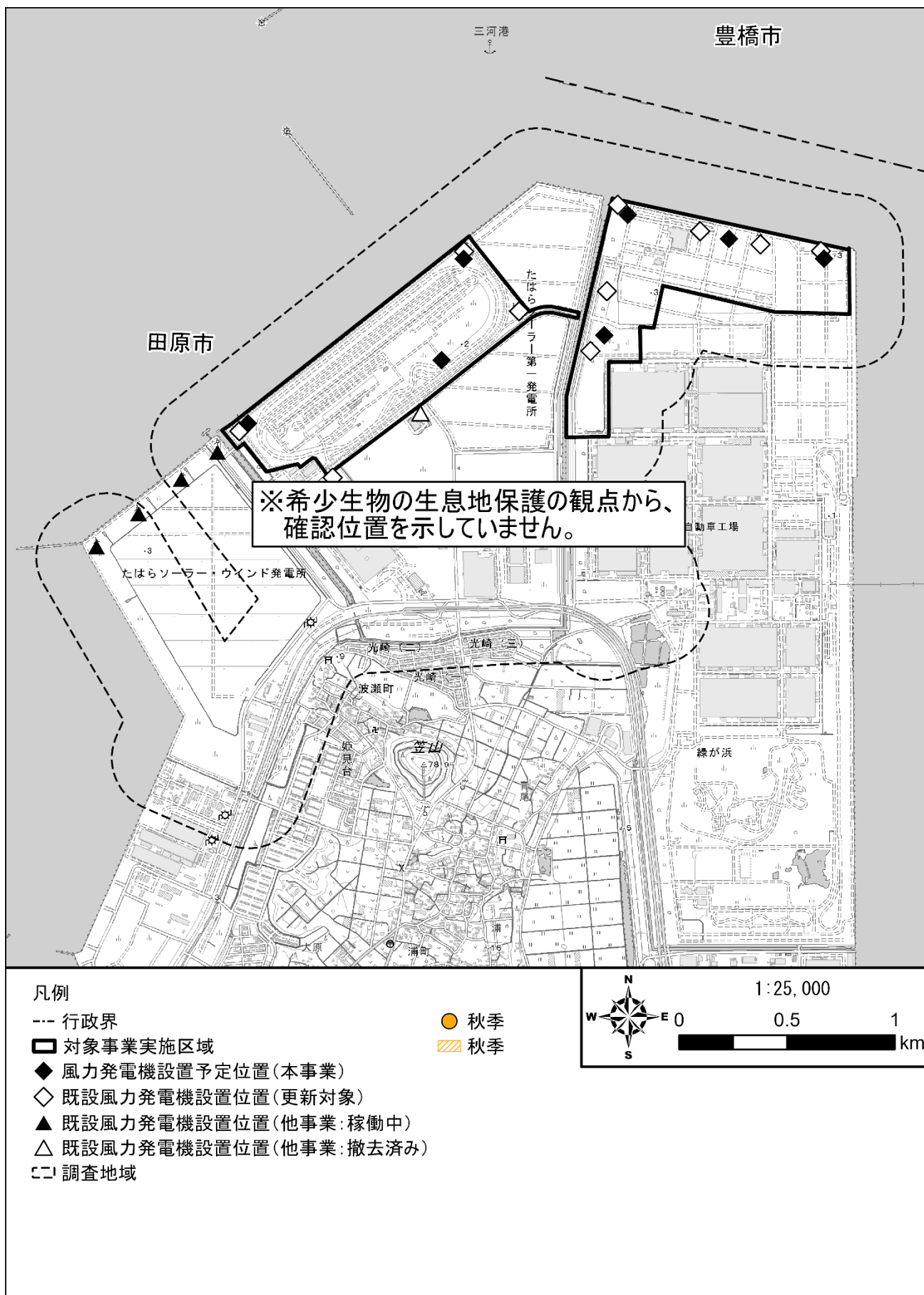


図 10.1.6-8(1) 植物の重要な種（ハマサジ）の確認位置

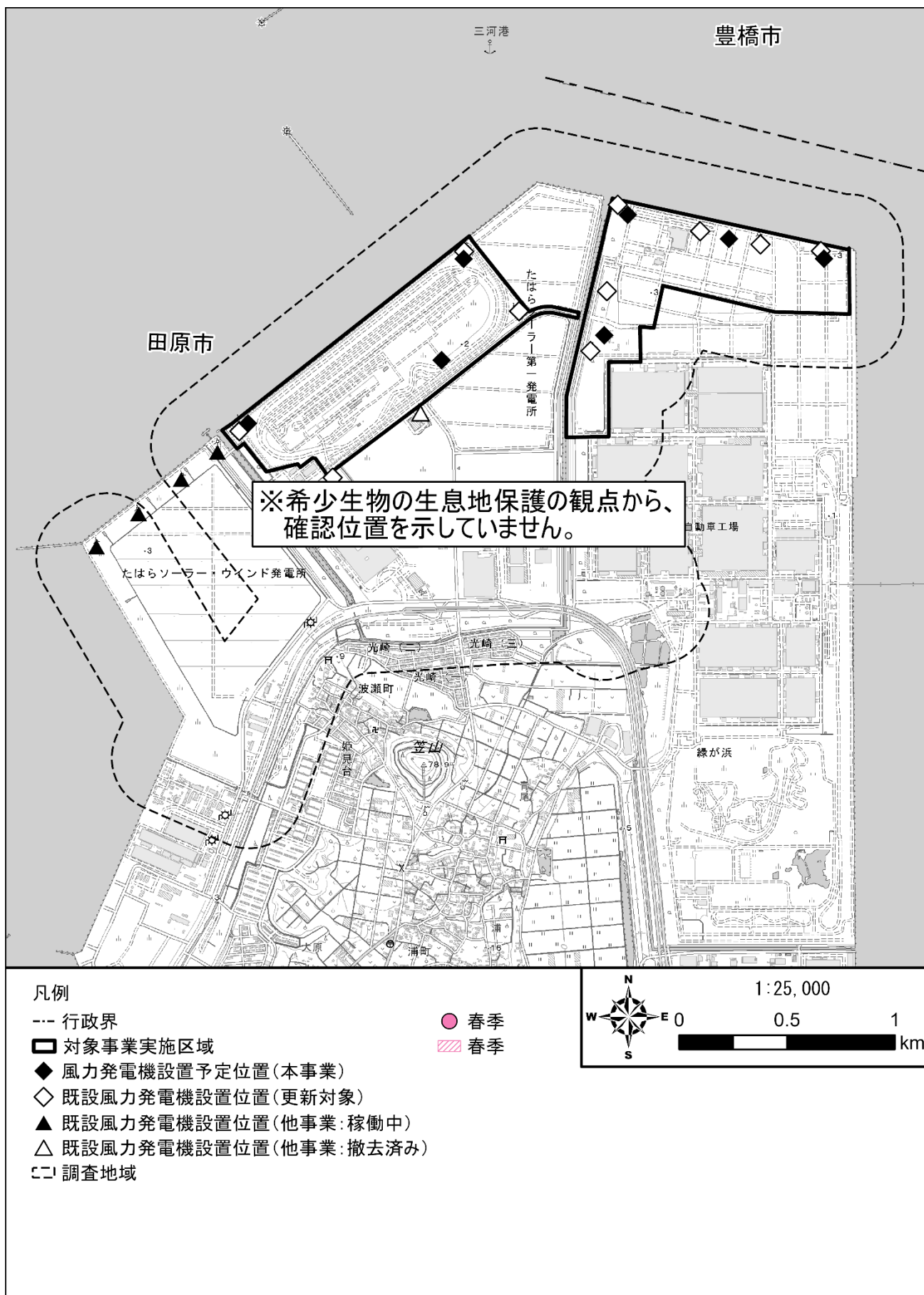


図 10.1.6-8(2) 植物の重要な種（カワデシヤ）の確認位置

(b) 重要な群落等

a) 文献その他の資料調査

(i) 調査の基本的な手法

植物の重要な群落の選定基準を表 10.1.6-13 に示す。

文献及びその他の資料により確認した植物群落について、学術上又は希少性の観点から重要な群落を抽出した。

表 10.1.6-13 重要な群落の選定基準 (1/2)

選定基準			カテゴリー
植物群落	A	「文化財保護法」(昭和 25 年法律第 214 号) 「愛知県文化財保護条例」(昭和 30 年条例第 6 号) 「田原市文化財保護条例」(昭和 52 年条例第 19 号) 「豊橋市文化財保護条例」(昭和 31 年条例第 23 号) 「豊川市文化財保護条例」(昭和 53 年条例第 15 号) 「蒲郡市文化財保護条例」(昭和 55 年条例第 13 号)	・ 特別天然記念物 (特天) ・ 天然記念物 (国天) ・ 愛知県天然記念物 (県天) ・ 田原市天然記念物 (田原天) ・ 豊橋市天然記念物 (豊橋天) ・ 豊川市天然記念物 (豊川天) ・ 蒲郡市天然記念物 (蒲郡天)
	B	「自然環境保全基礎調査 植生調査 (1/2.5 万) 第 6 回～7 回」(2025 年 8 月時点、環境省自然環境局 HP https://www.biodic.go.jp/) における植生自然度 9 又は 10 の群落	・ 植生自然度 9 エゾマツトドマツ群集、ブナ群集等、自然植生のうち多層の植物社会を形成する地区 ・ 植生自然度 10 高山ハイデ、風衝草原、自然草原等、自然植生のうち単層の植物社会を形成する地区
	C	「植物群落レッドデータブック」 (1996 年、財団法人 日本自然保護協会 他)	・ 植物群落 ランク 1: 要注意 ランク 2: 破壊の危機 ランク 3: 対策必要 ランク 4: 緊急に対策必要
	D	「第 2 回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査報告書」(1981 年、環境庁) 「第 3 回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査報告書」(1988 年、環境庁) 「第 5 回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査報告書」(2000 年、環境庁)	・ 特定植物群落 A: 原生林もしくはそれに近い自然林 B: 国内若干地域に分布するが、極めて稀な植物群落または個体群 C: 比較的普通に見られるものであっても南限、北限、隔離分布等分布限界になる産地に見られる植物群落または個体群 D: 砂丘、断崖地、塩沼地、湖沼、河川、湿地、高山、石灰岩地等の特殊な立地に特有な植物群落または個体群で、その群落の特徴が典型的なもの E: 郷土景観を代表する植物群落で、特にその群落の特徴が典型的なもの F: 過去において人工的に植栽されたことが明らかな森林であっても、長期にわたって伐採等の手が入っていないもの G: 乱獲その他の人為の影響によって、当該都道府県内で極端に少なくなるおそれのある植物群落または個体群 H: その他、学術上重要な植物群落または個体群
	E	「生物多様性の観点から重要度の高い湿地」 (2026 年 5 月時点、環境省 HP http://www.env.go.jp/nature/important_wetland/index.html)	・ 重要湿地

表 10.1.6-13 重要な群落の選定基準 (2/2)

選定基準			カテゴリー
巨樹・巨木林、天然記念物等	①	「文化財保護法」(昭和 25 年法律第 214 号) 「愛知県文化財保護条例」(昭和 30 年条例第 6 号) 「田原市文化財保護条例」(昭和 52 年条例第 19 号) 「豊橋市文化財保護条例」(昭和 31 年条例第 23 号) 「豊川市文化財保護条例」(昭和 53 年条例第 15 号) 「蒲郡市文化財保護条例」(昭和 55 年条例第 13 号)	・ 特別天然記念物 (特天) ・ 天然記念物 (国天) ・ 愛知県天然記念物 (県天) ・ 田原市天然記念物 (田原天) ・ 豊橋市天然記念物 (豊橋天) ・ 豊川市天然記念物 (豊川天) ・ 蒲郡市天然記念物 (蒲郡天)
	②	「第 4 回自然環境保全基礎調査 巨樹・巨木林調査」 (1991 年、環境庁) 「第 6 回自然環境保全基礎調査 巨樹・巨木林調査」 (2001 年、環境省)	・ 巨樹・巨木林
	③	「たはらの巨木・名木 100 選」(2018 年、田原市) 「とよはしの巨木・名木 100 選」(2026 年 5 月時点、豊橋市 HP http://www.city.toyohashi.lg.jp/7232.htm) 「蒲郡の名木 50 選」(2026 年 5 月時点、蒲郡市 HP https://www.city.gamagori.lg.jp/site/museum/meiboku-index1.html)	・ 巨木・名木

(ii) 調査地域

調査地域は、対象事業実施区域及びその周囲とした。

(iii) 調査の結果

文献及びその他の資料で確認した植物群落のうち、表 10.1.6-13 の選定基準に該当する重要な群落を表 10.1.6-14 及び図 10.1.6-9 に示す。

また、「植物群落レッドデータブック」（1996 年、我が国における保護上重要な植物種及び群落研究委員会）については、位置情報が不明なため図示していない。しかし、対象事業実施区域の大半が埋立地であることから、植物群落レッドデータブックに掲載された重要な群落は対象事業実施区域内には分布しないと考えられた。

対象事業実施区域内には自然植生（自然植生度 9 及び自然植生度 10）はわずかに分布するが、改変区域内には分布しない。

表 10.1.6-14 文献その他の資料調査で確認した重要な群落
(植物群落レッドデータブック)

番号	群落名	ランク
1	シデコブシ群落(渥美郡田原町)	3
2	シデコブシ群落(渥美郡田原町)	4
3	ヤチヤナギ群落(渥美郡田原町)	4
4	ヌマガヤ群落(渥美郡田原町)	4
5	シラタマホシクサ群落(渥美郡田原町)	4
6	アンペライ群落(渥美郡田原町)	4
7	ヨシ群落(渥美郡田原町)	4
8	低地中間湿原植物群落(渥美郡田原町)	4

出典)「植物群落レッドデータブック」（1996 年、我が国における保護上重要な植物種及び群落研究委員会）

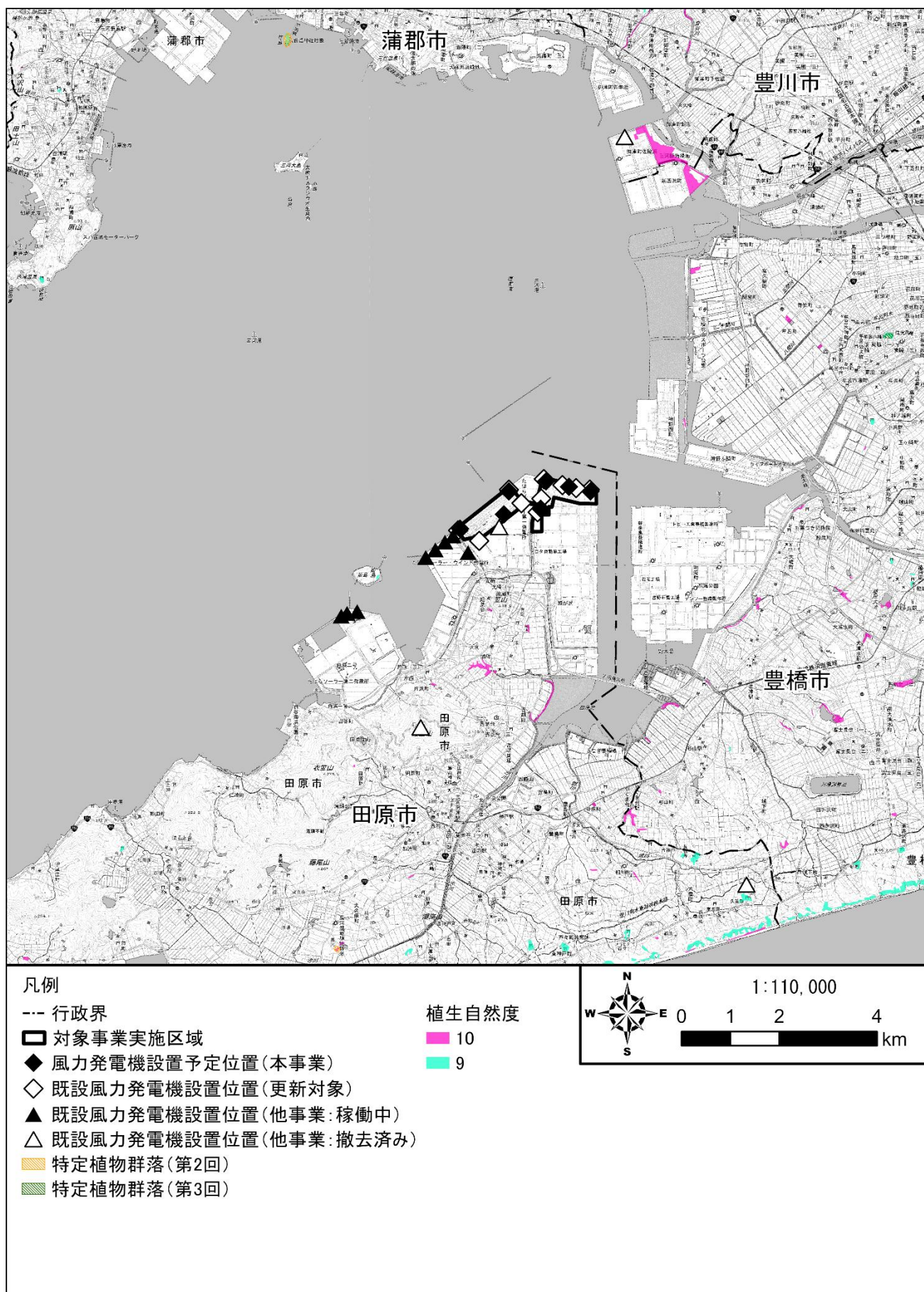


図 10.1.6-9 文献その他の資料調査で確認した重要な群落

b) 現地調査

(i) 調査の基本的な手法

調査地域で確認した植物群落について、表 10.1.6-13 の選定基準と同等の重要な群落を抽出した。

(ii) 調査地域

調査地域は、「2) 植生の状況」の現地調査の調査地域と同じ区域とした。

(iii) 調査の結果

現地調査の結果、植生自然度 9 及び 10 に該当すると考えられる重要な植物群落を表 10.1.6-15 及び図 10.1.6-10 に示す。

重要な植物群落として抽出された植生は、タブノキ・エノキ群落、ヤナギ低木林、ヒルムシロ属優占群落、コアマモ群落の 4 群落であった。このうち改変区域内に分布する重要な植物群落はなかったが、対象事業実施区域内に分布する重要な植物群落はヤナギ低木林であった。

表 10.1.6-15 確認した重要な植物群落（植生自然度 9、10）

凡例 番号	植物群落名	選定基準						植生面積 (ha)		
								対象事業実施区域内		対象事業 実施区域外
		A	B	C	D	E	F	改変区域内	改変区域外	
1	タブノキ・エノキ 群落		植 9					0	0	0.39
2	ヤナギ低木林		植 9					0	0.11	0.06
9	ヒルムシロ属優占 群落		植 10					0	0	0.36
10	コアマモ群落		植 10					0	0	0.22

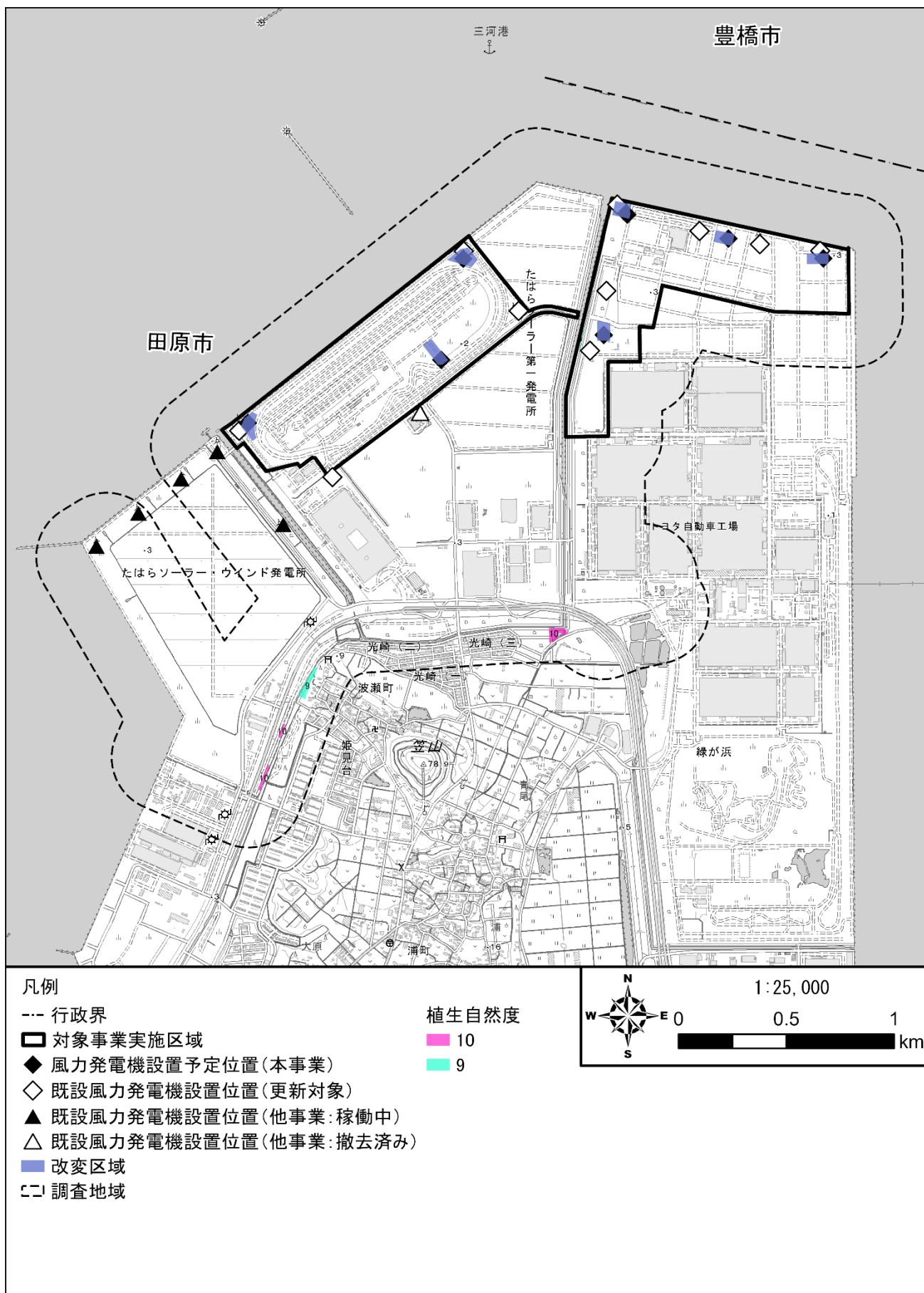


図 10.1.6-10(1) 重要な植物群落(植生自然度 9、10)の位置

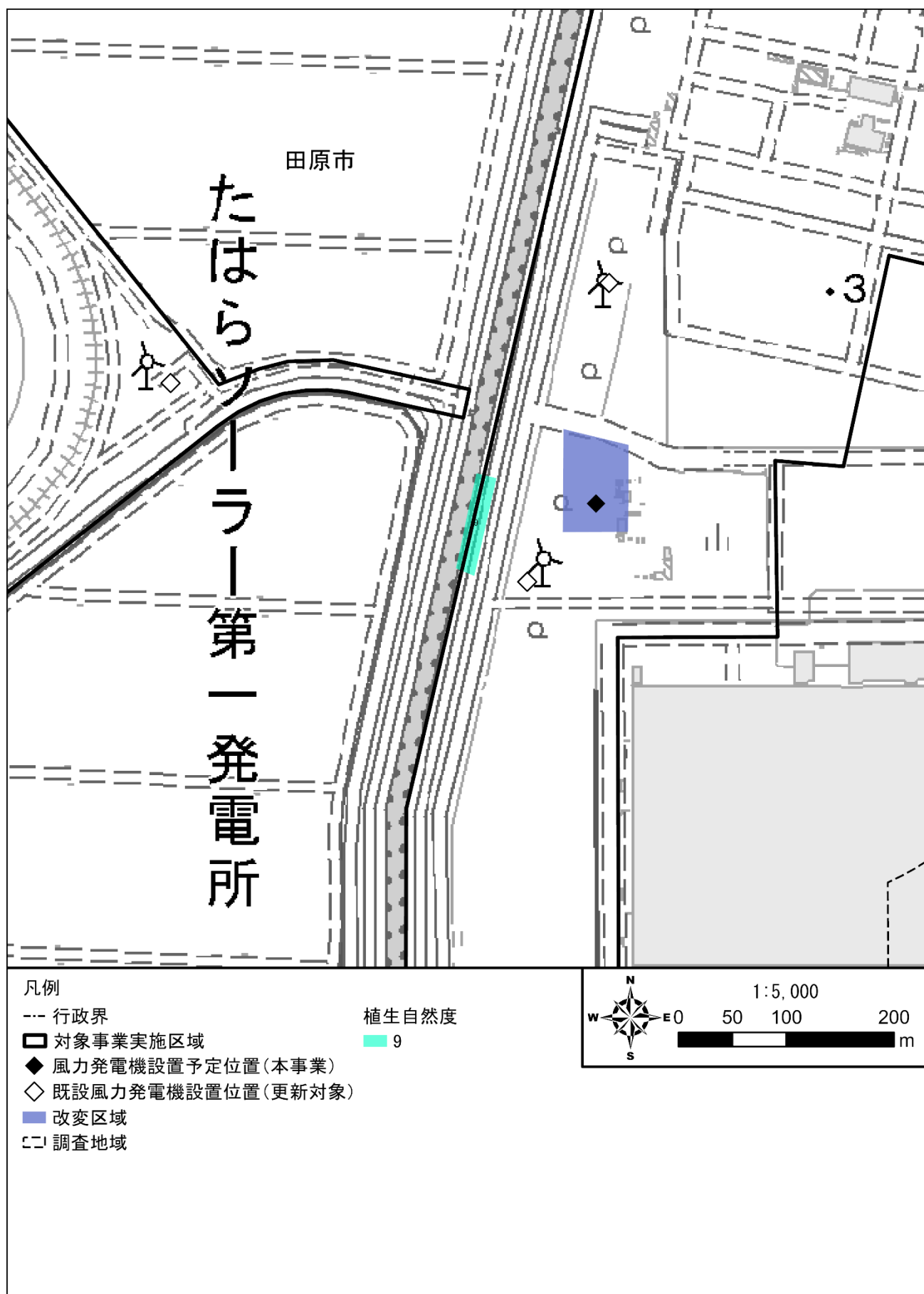


図 10. 1. 6-10(2) 重要な植物群落（ヤナギ低木林（植生自然度 9））の位置（拡大図）

(2) 予測及び評価の結果

1) 環境保全措置

植物の重要な種に対し、以下の環境保全措置を実施する。

< 改変による生育環境の減少・消失 >

- ・ 風力発電機組立ヤードの敷設に伴う樹木の伐採や土地の改変は、必要最小限にとどめる。
- ・ 改変区域外への必要以上の立ち入りを制限することにより、植物の生育環境を保全する。

2) 予測の基本的な手法

予測対象は、調査地域内で確認した植物の重要な種 2 種とした。なお、重要な群落として抽出されたタブノキ・エノキ群落、ヤナギ低木林、ヒルムシロ属優占群落、コアマモ群落の 4 群落については、ヤナギ低木林が対象事業実施区域内に分布しているものの、改変区域が位置する工場構内にはこれらの自然植生は分布していないことから、予測対象とはしなかった。

予測は、予測対象種毎に影響を受ける可能性がある要因を表 10.1.6-16 から選定し、その影響要因毎に環境影響の量的又は質的な変化の程度を推定した。また、それらの結果から総合的に判断して各種に対する影響の有無及び程度を予測した。

表 10.1.6-16 植物に対する影響要因一覧

影響要因の区分		影響要因の詳細
工事の実施	造成等の施工による一時的な影響	改変による生育環境の減少・消失
		改変部付近の生育環境の悪化
土地又は工作物の存在及び供用	地形改変及び施設の使用	改変による生育環境の減少・消失
		改変部付近の生育環境の悪化

3) 予測地域

予測地域は、調査地域と同じ区域とした。

4) 予測対象時期等

「工事の実施」については、造成等の施工による植物への影響が最大となる時期とした。また、「土地又は工作物の存在及び供用」については、風力発電施設の運用開始後とし、全ての風力発電機が稼働している状況を前提とした。

5) 予測の結果

(a) 影響要因

植物の予測対象種毎の影響要因を表 10.1.6-17 に示す。

「改変による生育環境の減少・消失」は、予測地域内で確認した重要な種を対象とし、影響を予測した。なお、「改変部付近の生育環境の悪化」については、生育地周辺の樹林が伐採された場合に影響を受けるおそれがある種を予測対象としているが、本事業で確認された重要な種はいずれも該当しない。

表 10.1.6-17 植物の予測対象種及び群落毎の影響要因

番号	種名	影響要因	
		工事の実施・ 土地又は工作物の存在及び供用	
		改変による生育環境の減少・消失	改変部付近の生育環境の悪化
1	ハマサジ	●	—
2	カワヂシャ	●	—

注) 「●」は影響要因として選定したことを、「—」は選定しなかったことを示す。

(b) 影響予測

植物の予測対象種毎の予測結果を表 10.1.6-18～表 10.1.6-19 に示す。

表 10.1.6-18 植物の重要な種の予測結果（ハマサジ）

分布・生態学的特徴	
・本州（三陸海岸以南の太平洋側）、四国、九州に分布する。 ・海浜の塩湿地の、満潮時には海水に浸かるような場所に生育する。 ・越年生草本である。葉は束生し、葉身は長楕円状へら形、長さ 8cm～17cm、幅 1.5cm～3cm、先端は鈍頭又はややとがり、下部は次第に狭まって柄状となり、質は厚く、辺縁は全縁である。 ・花期は 9 月～11 月、株の中央から高さ 30cm～50cm の花茎を伸ばし、よく分枝して、多数の小穂からなる円錐状の花序をつくる。小穂基部の苞は長さ 2mm～3mm で、鋭頭である。 【参考文献】 「レッドデータブックあいち 2020」（2020 年、愛知県）	
確認状況	
●分布状況 ・改変区域外で 580 株（3 地点）を確認した。 ○調査時期 ・秋季に 580 株（3 地点）をセイタカアワダチソウ群落、市街地・道路及び開放水域（内水面）で確認した。	
影響予測	
改変による生育環境の減少・消失	【工事の実施・土地又は工作物の存在及び供用】 改変区域内に生育していないことから、生育環境の減少・消失はないと予測する。
まとめ	事業の実施による本種への影響はないと予測する。

表 10.1.6-19 植物の重要な種の予測結果（カワヂシャ）

分布・生態学的特徴	
・本州、四国、九州、琉球に分布する。 ・川岸、溝の縁、田に生える越年生草である。 ・茎は直立又は斜上して高さ 10cm～100cm である。葉は狭卵形又は長楕円状狭卵形で先はややとがる。 ・5 月～6 月に、葉腋に長さ 5cm～15cm、幅 1cm～1.5 cm の細い花序を出し、50 個～120 個の花をつける。 【参考文献】 「改訂新版 日本の野生植物 5 ヒルガオ科～スイカズラ科」（2017 年、平凡社）	
確認状況	
●分布状況 ・改変区域外で 150 株（2 地点）を確認した。 ○調査時期 ・春季に 150 株（2 地点）をクロマツ植林で確認した。	
影響予測	
改変による生育環境の減少・消失	【工事の実施・土地又は工作物の存在及び供用】 改変区域内に生育していないことから、生育環境の減少・消失はないと予測する。
まとめ	事業の実施による本種への影響はないと予測する。

6) 評価の結果

(a) 環境影響の回避・低減に関する評価

改変による生育環境の減少・消失に伴う植物の重要な種への影響を低減するために、以下の環境保全措置を実施する。

<改変による生育環境の減少・消失>

- ・風力発電機組立ヤードの敷設に伴う樹木の伐採や土地の改変は、必要最小限にとどめる。
- ・改変区域外への必要以上の立ち入りを制限することにより、植物の生育環境を保全する。